

# フランス語の現在分詞とジェロンディフ

——同時性の用法をめぐって——

上 田 千 尋

はじめに

フランス語の現在分詞とジェロンディフ（以下 Gf と略記）について、多くの文法書では、現在分詞は形容詞的性質を持ち直近の名詞・代名詞にかかるのに対し、Gf は副詞的性質を持ち動詞にかかる、と述べられている。また、現在分詞が文語的、Gf が口語的であるという文体上の相違点も挙げられているが、両者はほぼ同じ意味を持ち、等価であるとされている。

朝倉（2002）は、主節の主語の同格節として用いられる現在分詞には時（同時性・先行性）・条件・対立・譲歩・原因の用法があり、Gf には同時性・原因・手段・様態・条件・対立・譲歩の用法があると述べている。現在分詞が主節の主語の同格節として用いられる場合は、副詞節で置き換えられる意味を帯びるため、同一文で現在分詞と Gf のいずれも容認される場合が少なくないという。

(1) a. Des gamins courent *en criant*.

b. Des gamins courent, *criant*.

(朝倉 2002)

春木（1992）をはじめ多くの研究者が指摘するように、現在分詞と Gf は両者とも同時性の意味を持つ。しかし、両者を入れ替えてもその文が同じ意味を表しているとはいえないのではないか。本稿の目的は、同時性を表す現在分詞と Gf がどのように異なるかを明らかにすることである。

## 1. 現在分詞とジェロンディフ

### 1.1. 時の定位点

Herslund (2000) は、時を表す現在分詞と Gf とははっきり異なるものだと述べている。その違いの一つは、主節動詞の事行を時間軸上に定位する基準点となるかどうかであり、基準点となるのは Gf であるという。

- (2) a. *En s'enfuyant de Grandson, Charles s'arrête quelques instants à Jougne.*  
 b. *Entrant dans Grandson, ils découvrent les pendus du mercredi des Cendres.* (Herslund 2000)

Herslund は両者のもう一つの相違点として、主節の事行と独立した事行を表すかどうかという基準を挙げている。

- (3) a. *La sultane s'est levée mettant fin à l'entretien.*  
 b. *La sultane a mis fin à l'entretien en se levant.* (Ibid.)

Herslund によると、Gf は一つの事行と他の事行が同時であることを表すのに対し、現在分詞はある事行が途切れることなく別の事行に推移するため、一つに溶け合う事行を表す。

Gettrup (1977) は、次の例では現在分詞のみが許容されるとしている。

- (4) *Quittant la place du marché avec son paquet de toile sous le bras, il alla faire des achats dans des boutiques de la rue principale.* (Gettrup 1977)

主節の事行を時間軸上に定位する基準点となるには、基準点が主節から独立していなければならないが、独立した事行を表す Gf は時の定位点となれるが、主節と一体になった事行を表す現在分詞は時の定位点にならないという。

Gettrup は、時の定位点となるかを判定するために、*quand* 節に置き換えられるかという基準を採用している。基本的に «*Quand P, Q.*» では事行 P と Q は同時に起きていて、*quand* は同時性を表す。(5) では、現在分詞の事行が主節の事行より先に起きていて同時性がないため、*quand* 節に置き換えることはできず、(5)' のように一種の主節として働くと Gettrup は説明する。

(5) *Prenant* Urbain à bout de bras, il le déposa doucement sur le sol. (*Ibid.*)

(5)' Il prit Urbain à bout de bras et le déposa doucement sur le sol. (*Ibid.*)

Gettrup のこの分析は、現在分詞が同格的・並置的に機能するのに対し、Gf 句は従属節的であるという渡邊 (2017) の主張と重なっている。

(6) a. *Entrant* dans le salon des Rouargue, Gilles eut l'impression que son enfance lui sautait à la tête.

b. *En entrant* dans le salon des Rouargue, Gilles eut ainsi l'impression que son enfance lui sautait à la tête. (渡邊 2017)

そして渡邊は、時間的的定位は文要素として文内に包摂されるものであり、現在分詞が持つ並置的な性質と合わないため、現在分詞は時間的的定位を表さないと主張する。

## 1.2. 時間的な重なり

Gettrup (1977) によると、Gf の事行と主節の事行は、たとえ部分的であっても同時でなくてはならない。

(7) *En prenant* la main de l'inconnu, elle fut étonnée de la sentir chaude comme celle d'un fiévreux. (Gettrup 1977)

一方、現在分詞は時の定位点ではないため、二つの事行の同時性を表さず、いかなる時の関係も表すことがないと述べている。ただし、二つの事行の間に部分的な重なりがある場合は、現在分詞も Gf も使うことができ、両者の違いはほとんどみられないという。

(8) a. *en traversant* la place Saint-Sulpice, il s'est heurté contre un banc et il est tombé.

b. ...*Traversant* l'Autriche, il fut fait prisonnier par le duc Léopold. (*Ibid.*)

ここで注意すべきは、Gettrup が現在分詞は同時性を表さないとしておきながら、二つの事行に部分的な重なりがあれば、現在分詞も Gf も可能と主張していることである。つまり、Gettrup の主張は、現在分詞は時の定位点になる

ことはできないが、現在分詞の事行と主節の事行の間に時の関係が全くないということではない、と解釈できるだろう。

Herslund (2000) によると、前置された現在分詞は、主節の表す事行の最初の段階か、主節の事行を引き起こした要因を表す。

(9) *Se recroquevillant dans son lit, elle s'était remise à sangloter.*

(Herslund 2000)

後置された現在分詞は、主節の事行の一局面 ((10 a)) や、主節の事行の最終段階 ((10 b)), 主節と完全に重なる事行 ((10 c)) などを表す。

(10) a. *Il s'était tassé, s'enfonçant dans le fauteuil.*

b. *Le 12 mai, les Germano-Italiens se rendent au cap Bon, laissant aux Alliés un bon nombre de «Tigre».*

c. *Ma sœur se tenait de l'autre côté, s'appuyant sur la rampe.* (Ibid.)

Gettrup (1977) は、現在分詞は主節の事行の同時性を表さないとしているが、Herslund (2000) は、(10 c) のように後置された現在分詞が主節と完全に重なる事行を表すことがあると主張する。本稿では、現在分詞が主節の事行との同時性を表すことができるという Herslund や春木の主張に基づき、考察を行う。

## 2. Gettrup (1977) によるジェロンディフの解釈

### 2.1. 時の定位点になれるのか

Gettrup (1977) は、Gf が従属節として働き、時の定位点と解釈されるのに対し、現在分詞は時の定位点とはならず、主節のように振る舞うという主張の傍証として、Gf が性質の異なる時の表現と並べて同時に使うことができることを挙げている。

(11) *Fatigué en quittant le lycée, après tes six heures de classe...tu as fait tout un grand détour jusqu'à l'Île de la Cité.* (Gettrup 1977)

また、Gettrup は Gf の意味がどのように決まるかについて、動詞の情報の

重要度を問題にしている。(12 a) は「時」の意味に、(12 b) は事行並立の意味になるという。

(12) a. *Je chante en me rasant.*

b. *Je me rase en chantant.* (*Ibid.*)

Gettrup によると、「髭を剃る」という行為は日常的にありふれたことで既知であり、情報の重要度は高くない。しかし、みんなが髭を剃る時に歌うわけではないため、「歌う」という行為は予測不可能、未知であり重要な情報であるという。つまり、(12 a) の Gf は既知の事行を指し、時の定位点とみなされるのに対し、(12 b) の Gf は未知の事行を指し、随伴状況とみなされる。ここで注意すべきは Gettrup が情報の既知・未知という性質を拡大解釈していることである。Gettrup は、既知という用語を「先行文脈に現れている」という解釈と、「日常的に行われていて、特に目新しいものではない」という解釈の両方の意味で用いているようである。また、Gf の事行が既知ではないが、予測可能な場合も多くあり、このような場合も、情報の重要度は低くなるため時の定位点と解釈されやすくなるという。

(13) *Tout était si clair dans sa tête, qu'en levant les yeux il s'étonna de voir autour de lui des murailles de livres au lieu de l'espace infini.* (*Ibid.*)

ここで、Gettrup のいう「予測可能」という用語が「ステレオタイプのシナリオに沿っている」ということであると考えると、Gettrup の主張は、Gf の事行が先行文脈ですでに言及されているか、日常的に行われていて特に目新しいものではない(既知)、またはステレオタイプのシナリオに沿っている(予測可能)という理由で情報の重要度が低い時、時の定位点と解釈されやすい、と説明することができる。

## 2.2. 時間的な重なりがあるか

Gettrup (1977) は、Gf はたとえ部分的であっても二つの事行が同時でなくてはならず、時間的な重なりが必要であると主張するが、次のような反例も見られるという。

(14) *En apprenant ces nouvelles, le roi décida de convoquer ses barons.* (Gettrup 1977)

(15) *En atteignant la promenade du bord de mer, ils hésitèrent, faillirent continuer chacun de son côté.* (*Ibid.*)

Gettrup は、(14)、(15) では主節の動詞 *décider* や *hésiter* は心理的事行を表しており、このような場合に限り同時性の制約が解除されるのではないかと述べている。動詞が心理的ではなく物理的な事行を表すときは、二つの事行に重なりがあると Gf が使えるが、重なりがない場合は現在分詞しか使うことができないという。また、Gf が移動、経験、知覚を表す到達動詞、または毎日繰り返される動作を表す動詞の場合に時の解釈になりやすいという。

(16) a. *En sortant, les étudiants paraissaient très contents.* (Franckel 1989)

b. *Je chante en me rasant.* (Gettrup 1977)

### 2.3. 主節の時制との関係

Gettrup (1977) によると、Gf が到達動詞で主節が単純過去・複合過去の場合に、*quand* 節に置き換えることができ、時の解釈になる。

(17) a. *En arrivant tout près de la maison, il remarqua son aspect étrange...*

b. *En la voyant, les jumeaux poussèrent un glapisement joyeux.*

(Gettrup 1977)

そして、Gf が時の定位点として解釈される例には、(17 a) のような移動動詞 + 出発点・到着点を表す状況補語または目的語、もしくは (17 b) のような動詞 + 目的補語という統語的・意味的構造が見られるという。また、ほとんどの例で Gf の事行は既知・予測可能であるとしている。

次に、Gf が到達動詞で主節が半過去の場合、*quand* 節と同じ点括読み ((18 a))、反復読み ((18 b))、*pendant* と同じ継続読み ((18 c)) の三つのアスペクト解釈が可能であるという。

(18) a. *En sortant de chez lui, vers huit heures du matin, Maigret avait le choix entre trois démarches.*

- b. ici, c'était beau la nature ; il y avait des étoiles. *En renversant* la tête, je les voyais.
- c. *En s'éloignant* sur la route, Arsène s'étonnait d'avoir ainsi arrêté Juliette. (Ibid.)

そして、主節が単純過去・複合過去で、従属節の動詞が到達動詞の場合は、現在分詞も Gf も使えると Gettrup は主張する。

- (19) a. *Sortant* de table, l'oncle Henri a embrassé Claude et François qui sont allés au lit sans trop faire de difficultés pour une fois.
- b. *En sortant* de table, l'oncle Henri a embrassé Claude et François qui sont allés au lit sans trop faire de difficultés pour une fois. (Ibid.)

この例だけをみると、現在分詞と Gf の働きには違いがないようにみえるが、Gettrup はそうでない理由として、従属節の動詞が到達動詞で主節が単純過去・複合過去という統語的環境では Gf が圧倒的に多いことや、現在分詞の表す事行は Gf よりも偶発的であることを挙げている。しかし、Gettrup が挙げるこの二つのことを説明する決定的な証拠はないと思われる。

また、主節が半過去の場合には、従属節の動詞が到達動詞であっても、現在分詞は容認されにくいという。Gettrup は、その理由を説明するのは難しいと述べているが、一般にフランス語の半過去は非自立的な時制であるといわれている。大久保 (2007) によると、(20 a) の文は安定しないが、(20 b) や (20 c) のように過去のある時点を示す状況補語や、単純過去など時間的限定を加える要素が入ると問題なく容認される。

- (20) a.? Marie buvait un café.
- b. Hier à huit heures, Marie buvait un café.
- c. Paul entra. Marie buvait un café. (大久保 2007)

つまり、半過去が非自立的な時制であることは、過去のある時点を示す状況補語や、複合過去・単純過去などの時間的限定を行う言語的要素が必要とされることから明らかである。このことから、主節動詞が半過去の場合に Gf が許容されるのは、Gf は基準点を与えることができるが、現在分詞は基準点を与

えることができず半過去では許容されないからだと説明することができる。

### 3. Franckel (1989) と repère

Franckel (1989) は、前置された Gf は時の定位点 (repère temporel) として節と節を結ぶ働きを持つと主張する。(21) の Gf は、「Quand je suis sorti,...」のように従属節と同じ働きをする。

(21) *En sortant, j'ai claqué la porte.* (Franckel 1989)

そして、後置された Gf は大きく二つに分けられるという。一つは、前置 Gf のように定位点となる場合である。

(22) *Je rigole toujours, en le voyant.* (*Ibid.*)

もう一つは、主節の状況補語として、節の内部で働く場合である。このとき、定位点として働くのは主節または発話状況であり、Gf は主節動詞の表す事行がどのように行われたかを表す。

(23) *Je me suis brûlé en refermant le four.* (*Ibid.*)

(23) で主節が定位点となる場合、主節の結果をもとに、Gf が表す原因を述べることになる。そして、発話全体が発話状況に定位される場合、(23) の文は「Que s'est-il passé ?」などの質問の答えになるか、「Aïe! Je me suis brûlé en refermant le four!」のような感嘆文になる。この場合、原因も結果も先に与えられておらず、発話がまとまって発話状況に対して定位される。このように、Franckel (1989) が repère と呼ぶものは、発話を構築するときに出発点となるもの (support de départ) であり、談話機能文法の「主題 (topic/thème)」とよく似ている。ここで注意しなければならないのは、repère 「定位点」というものが時間的なものに限られない、ということである。

Franckel (1989) は (24)-(26) の主節と Gf に変化を加え、容認度の変化を考察している。

(24) *En sortant, j'ai claqué la porte.*

(25) *En partant, je l'ai injurié.*



(26) *En allant à Besançon, je suis passé par Dijon.* (Franckel 1989)

これらの文の主節を Gf に変え、Gf を主節にすると容認度が低くなるという。この容認度の低下は Gf が前置された場合に起こり、後置された場合には容認度は下がらない。Franckel はこの容認度の変化について、事行がもともと持っている語彙的アスペクトと「離散的 (discret), 離散化 (discrétisation)」という用語によって説明しようとしている。しかし、この説明は問題の解明には少し不十分である。前置された Gf は repère 「定位点」として働くが、Franckel が repère と呼んでいるものは、次のような働きを持つと考えられる。

- (A) 主節が表す事行がいつ・どこで起きたのかという枠組みを設定する。
- (B) 主節が表す事行を時間軸上に位置づける。
- (C) 因果関係の意味的連鎖の中で原因と解釈される、先行する事行を提示する。

問題となるのは、主節と Gf のどちらの事行が repère としてふさわしいかということである。大きな出来事は小さな出来事の枠組みとなるが、その逆は成り立たない。したがって、二つの事行の意味的性格が関係する。(24) では、Gf の「出かける」の方が、主節の「ドアをボタンと閉める」より大きな事行であり、枠組みになることができる。

#### 4. 問題提起と仮説

ここでいくつか疑問点を挙げる。

Gettrup (1977) は、Gf と主節の事行の間にはたとえ部分的であっても時間的な重なりが必要であると主張するが、阪上 (2010) は、次の例では二つの事行の間に重なりはみられないとしている。

(27) *En sortant du minibus je tombai sur Lionel, qui était arrivé la veille.*

(Houellebecq, M., *Plateforme*, cité par 阪上 2010 : 39)

この場合、Gf の事行と主節の事行の間には時間的な重なりがないといえるのだろうか。Gettrup は主節動詞が心理的事行を表す場合は例外としているの

だが、(27)の動詞は心理的事行を表さない。この(27)も例外なのだろうか。

また、Gettrup (1977)は、Gfが時の定位点と解釈されやすいのは、Gfの事行が既知または予測可能で情報の重要度が低い場合である、と述べている。Gettrupが挙げている例では、Gfが到達動詞の場合は主節に対して前置、毎日繰り返される動作の動詞の場合は後置されているが、動詞のタイプによって前置・後置が決まるのだろうか。これら以外の動詞がGfに置かれた場合でも、時の定位点と解釈できることがあるのだろうか。

以上の疑問点を踏まえ、次の仮説を提示する。

- (28) a. 現在分詞の事行と主節の事行の間には時間的な重なりがある。  
 b. Gfが時の定位点となる場合、何らかの解釈において、Gfの事行と主節の事行との時間的な重なりが確認される。  
 c. Gfの動詞のタイプによって前置・後置が決まるわけではない。

この仮説を検証するため、次章で実例を取り上げて分析する。

## 5. 実例の分析

### 5.1. 主節に対して前置された現在分詞

現在分詞が時間的的定位点にならないことについて、先行研究の見解は一致しており、本研究も同じ立場に立脚する。(29)では、現在分詞が主節に対して前置されている。

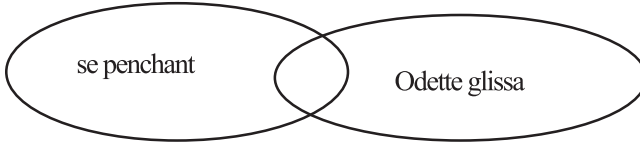
- (29) (作家バルタザールのファンである主人公オデットが、彼の握手会に行き、ファンレターを渡す。) *Se penchant, Odette lui glissa une enveloppe.*

(Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, p.224)

現在分詞が前置された場合、現在分詞の動詞と主節の動詞の関係が強く現れ、主節の事行の最初の段階を表す。インフォーマントによると、この現在分詞をGfに書き換えることも可能である。(29)の現在分詞と主節の動詞の関係を図式化すると(29)'のようになり、左側の事行から右側の事行へと時間

が流れているのを表している。

(29)'



## 5.2. 主節に対して後置された現在分詞

例 (30)-(32) では、現在分詞が主節に対して後置されている。

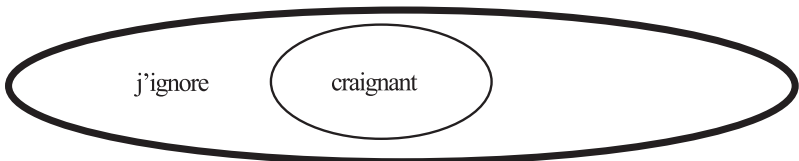
(30) (主人公 Anne は、自分の家庭の事情を père Deau が知っていたとわかる。)

L'expression de son visage demeure douloureuse et m'effraie, tout à coup : j'ignore quelle réponse lui donner, *craignant* qu'elle n'ajoute à sa détresse.

(Anne Wiazemsky, *Un Saint Homme*, p.37)

(30) では、現在分詞が原因を表している。インフォーマントによると、この例では現在分詞の事行が主節の事行の一側面を表すと捉えられる。これを図式化すると、(30)' のようになる。

(30)'



(31) (編集者のジャン＝クロードはボブスレーの選手たちにコースのスタート地点に連れて行ってもらい、スタートの真似事をしようとしたが、滑走路に滑り落ちてしまう。)

Il avait dévissé pendant une centaine de mètres, *faisant* voler la neige fraîche qui s'était déposée sur la glace.

(Roger Grenier, *La salle de rédaction*, p.197)

(31) で現在分詞は主節のように働き、«Il avait dévissé pendant une centaine de

mètres, et il avait fait voler...»と書き換えられる。二つの事行の関係は、(31)'のように完全に重なるという捉え方と、(30)'のように現在分詞の事行が主節の事行の一側面を表すという捉え方の二つが可能である。

(31)'



(32) (バーで酒を飲んだ後、酔ったジャン＝クロードを私が部屋まで送っていった。)

Je l'entraînai. Devant la porte de sa chambre, il répéta :

— Je vais faire mon papier.

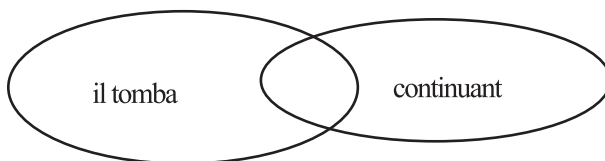
Il tomba en travers du lit, *continuant* à bredouiller :

— Papier...

(*Ibid.* p.182)

(32) は、「Il tomba en travers du lit, et il continua à bredouiller.」のように、現在分詞の部分が独立節と同じ働きをし、ここでは主節の事行の最終段階を表している。

(32)'



そして、渡邊 (2017) が指摘するように、現在分詞には結果を表す用法がある。この用法は次の (33) のような報道文で多くみられる。現在分詞は主節の事行の最終段階を表しているため、(33) は (32)' と同じように図式化できる。

(33) L'accident le plus meurtrier impliquant PIA à ce jour s'est produit en 1992.

Un de ses A 300 était descendu prématurément vers l'aéroport de la capitale

népalaise Katmandou et s'était écrasé sur une colline, tuant 167 personnes.

(*Le Monde*, 22/05/2020)

渡邊 (2017) は、現在分詞の原因と結果の用法について、現在分詞が主節に対して前置された場合は原因を、後置された場合は結果を表しうると述べている。結果の用法については、現在分詞の事行が主節の事行の最終段階を表すため、現在分詞は後置される。しかし、原因の用法については、確かに現在分詞節が主節に前置されるのが自然であり、実例でも前置の例が多い。しかし、理由を表す現在分詞が後置されている (30) では、現在分詞の位置よりも、主節の事行と現在分詞の事行それぞれが表す意味が語用論的に解釈される結果、原因の意味が導き出されると考えられる。

このように、現在分詞によって同時性が表される場合は、現在分詞の事行と主節の事行が一体となっていることが強く示されていると考えられる。

### 5.3. ジェロンディフの時間的な重なり

#### 5.3.1. 移動・知覚を表す動詞

まずは、Gf が主節に対して前置されている例を分析する。(34)-(36) の Gf の動詞は移動・知覚を表し、repère の役割を果たしている。

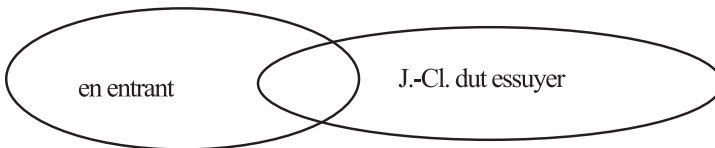
(34) (ジャーナリストの私とジャン＝クロードはプレス・キャンプに着いた。)

*En entrant, Jean-Claude dut essayer ses lunettes qui se couvraient de buée.*

(Roger Grenier, *La salle de rédaction*, p.170)

(34) の主節の動詞は単純過去であり、Gf の事行と主節の事行は部分的に重なっている。図式化すると (34)' のようになる。

(34)'

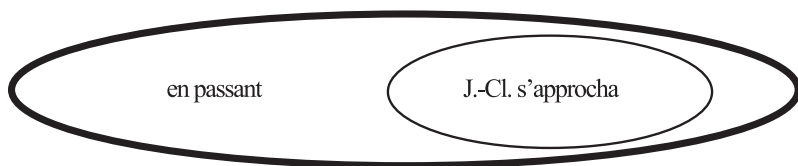


(35) では、主節の動詞が単純過去である。(34) と異なるのは、(35) では主節の事行が Gf の事行に包含されていることである。

(35) (夕食の後、ジャン＝クロードと私はそれぞれの部屋に戻っていく。)

*En passant* dans le hall, Jean-Claude s'approcha des grandes glaces qui donnaient sur la rue. (Roger Grenier, *La salle de rédaction*, p.177)

(35)'



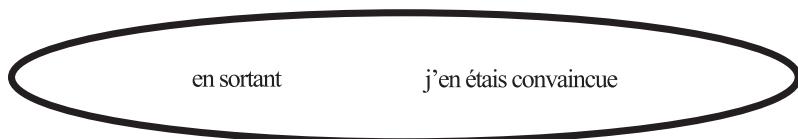
そして、次の (36) では主節の動詞が半過去であり、二つの事行は完全に重なっている。

(36) (幼馴染の Antoine Gallimard から言われた一言が、Anne の考えを変えた。)

Il a suffi qu'il me dise : «J'espère que ce n'est pas une nouvelle de plus», pour que je lui réponde du tac au tac, avec naturel et sincérité : «Mais non, Antoine, c'est un roman!» *En sortant* de son bureau, j'en étais convaincue.

(Anne Wiazemsky, *Un Saint Homme*, p.54)

(36)'



次に、Gf が主節に対して後置される例を分析する。

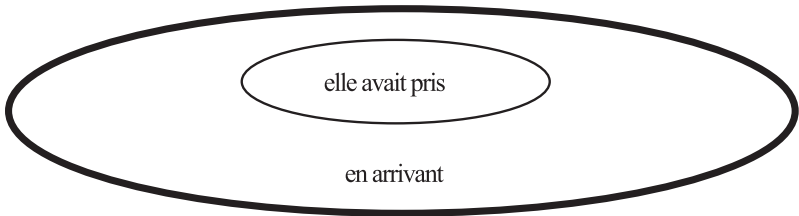
(37) (Jana は警察に自供するのではなく逃走することを選んだが、なぜそうしたかわからなかった。)

Elle avait pris une douche *en arrivant* mais elle se sentait toujours souillée.

(Caryl Férey, *Mapuche*, p.357)

(37) の Gf の動詞は移動を表す動詞であり、主節の動詞は大過去形である。Gf の事行と主節の事行の意味関係を見ると、「到着する (した)」後に「シャワーを浴びる」となり、事行の重なりがないように見える。しかし、インフォーマントによると、(37) の *en arrivant* は移動の行為を表しているのではなく、主節の事行が起こっている状況 (situation) を構築しており、枠組みを構成している。そのため、Gf は *repère* の役割を果たしており、その枠組みの中に主節の事行が包摂される。

(37)'



このことは、4章で挙げた例 (27) についても当てはまる。(27) の *en sortant* は「(ミニバスから) 外に出る」という点括的な事行を表すのではなく、「リオネルにばったり会う」という主節の事行が起こった状況を構築している。そのため、この二つの事行は一見継起的に起こっているように見えるが、主節の事行は Gf の事行の枠組みの中に入っており、時間的な重なりがあると解釈できるのである。

そして、(38) では知覚を表す *entendre* が Gf となっている。

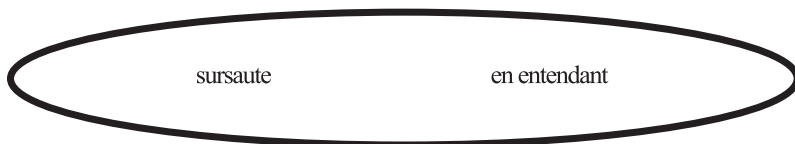
(38) (教会堂のそばで Anne と père Deau が会話をしている。)

Je promets, il m'effleure la joue avec tendresse et soudain sursaute *en entendant* les cloches de la basilique sonner 4 heures.

(Anne Wiazemsky, *Un saint homme*, p.95)

この場合、3.1. で挙げた例 (23) のように、*repère* となるのは発話状況である。(38) では、発話全体がまとめて発話状況に定位されており、Gf と主節の事行は完全に重なっている。

(38)'



## 5.3.2. 毎日繰り返される動作を表す動詞

例 (39) は、「タバコを吸う」という動詞が後置 Gf に置かれている例である。

(39) Je conduis *en fumant*.

(39) で、*repère* となるのが Gf の場合と主節の場合のそれぞれのシチュエーションに相当する例を挙げ、図式化する。なお、ここでは、Gettrup (1977) による「Gf が後置でも *repère* になりうる」という主張に依拠する。

(40) シチュエーション例① (Gf が *repère*) :

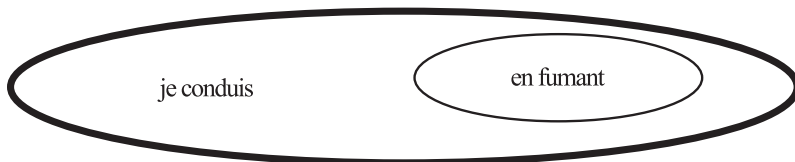
A : Ça sent le tabac dans ta voiture.

B : Oui, je conduis toujours *en fumant*.

図式は (38)' と同じである。

(41) シチュエーション例② (主節が *repère*) :

A : Tu aimes conduire?

B : Oui, je conduis *en fumant* des petits cigares, ce que je ne peux faire nulle part ailleurs.

次に、(39) の Gf を前置する。この場合、*repère* となるのは Gf である。(42) のシチュエーションの一例として、(43) が考えられる。図式は (36)' と同じである。

(42) *En fumant*, je conduis.



(43) A : Tu fumes dans ta voiture?

B : Oui, *en fumant*, je conduis mieux.

Gettrup (1977) が挙げる例では、日常的な動作を表す Gf は後置されたもののみであったが、このように前置することも可能である。Gf が前置されると *repère* と解釈される傾向がある。しかし、後置された場合、Gf が *repère* と解釈される例もあれば、主節が *repère* と解釈される例もある。

### 5.3.3. その他の動詞

Gettrup (1977) は、Gf が時の定位点となる場合、Gf の動詞は移動・知覚を表す動詞、または毎日繰り返される動作を表す動詞となる傾向があると述べているが、これらのタイプの動詞以外にも、時の定位点となる Gf の例が数多くみられる。

(44) Olivier sourit. Il existait des rites de langage qui faisaient échanger plusieurs fois le même mot comme s'il affirmait une compréhension réciproque, tissait un lien. En arrondissant généreusement, le total faisait vingt francs et Olivier tendit le billet tout neuf que la caissière fit claquer entre ses doigts. *En rangeant* sa monnaie, il se sentait tout joyeux, prêt à plaisanter ou à rire.

(Robert Sabatier, *Les Fillettes chantantes*, p.124)

(44) では主節の動詞 *se sentir* が半過去形であるため、時間的的定位点となるのは必然的に Gf のほうである。Gf の事行と主節の事行は完全に重なっており、図式化すると (36)' と同じようになる。

次の例 (45), (46) では、主節の動詞は複合過去形または単純過去形であり、Gf が *repère* として働いている。

(45) Et puis, j'ai eu un fils, à mon tour. J'ai participé à ce mystère dont rien, avant l'initiation, ne peut donner l'idée. *En tenant* ce bébé dans mes bras, j'ai eu la soudaine révélation de ce que mon père avait éprouvé, lors de ma venue au monde, et que, d'âge en âge, il avait continué de ressentir.

(Claude Mauriac, *Mauriac et fils*, p.404)

(46) (私は Maure を送り出し、音楽室まで歩いていく。)

*En ouvrant la porte, je feignis la surprise : «Ah, je vous demande bien pardon, Madame dis-je, je vous croyais à Clagny et je pensais qu'une de vos femmes se permettait...»* (Françoise Chandernagor, *L'Allée du Roi*, p.317)

(45) は主節の事行が Gf の事行の中に包摂されていて、図式は (35)' のようになる。一方、(46) は二つの事行が部分的に重なっており、Gf は前置のみが許容される。図式は (34)' と同じである。

このように、Gf の動詞が、移動・知覚を表す動詞や毎日繰り返す動作を表す動詞でない場合でも、時の定位点として解釈される例が少なくない。二つの事行の時間的な重なりについても、5.3.2. と同じ結果が得られる。

### おわりに

まず、現在分詞は並置的に機能するため時の定位点にはなれず、独立節のような働きをする。現在分詞が前置の場合は、現在分詞の事行から主節の事行に途切れることなく移行する。そして後置の場合は、主節の事行と完全に重なる、あるいは主節の事行の一局面や最終段階を表す。このように、現在分詞の事行と主節の事行は一体となって一つの出来事を表すため、二つの事行の間に時間的な重なりがみられる。

次に、Gf は前置された場合 *quand* 節のような従属節としての働きを持ち、時の定位点となることができる。後置されると、前置の場合と同じように定位点となることもあるが、主節あるいは発話状況が定位点となることもある。Franckel (1989) が *repère* (定位点) と呼ぶものは、枠組みを設定して事行を時間軸上に位置づけるものであるため、Gf の事行が主節の事行より大きい出来事である場合、Gf が *repère* として働く。このように、Gf の事行と主節の事行の意味関係によって、Gf と主節のどちらが *repère* となるかが決まる。Gf が *repère* となる時、二つの事行が部分的に重なることも、完全に重なることも、主節の事行が Gf の事行に包摂されることもある。これは主節の時制が大きく

関係すると考えられる。

したがって、伝統文法では現在分詞と Gf はほぼ同じ意味を持ち等価であるとされているが、その二つの機能は大きく異なるといえるだろう。

#### 主要参考文献

朝倉季雄（2002）『新フランス文法事典』，白水社。

Franckel, J.-J. (1989). *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Genève, Droz.

Gettrup, H. (1977). «Le gérondif, le participe présent et la notion de repère temporel», *Revue romane*, 12, 2, 211-271.

春木仁孝（1992）「ジェロンディフー現在分詞構文との比較ー」, 『Gallia』 31, 12-21。

Herslund, M. (2000). «Le participe présent comme co-verbe», *Langue française*, 127, 86-94.

目黒士門（2015）『現代フランス広文典』，白水社。

大久保伸子（2007）「J'attendais 型の半過去の表現特性と非自立性について」, 『フランス語学研究』, 41, 1-15。

阪上るり子（2010）「ジェロンディフの時・アスペクト価値」, 『金沢大学歴史言語文学系論集 言語・文学篇』, 2, 29-46。

渡邊淳也（2017）『ジェロンディフと現在分詞の意味論・語用論』, デザインエッグ。

（関西学院大学文学研究科博士課程前期課程修了）